# Ⅶ. シンポジウム

## ＩＯＣ体制と現代スポーツ

・日　時　1986年12月16日
・場　所　一橋大学特別応接室
・主　催　一橋大学体育共同研究室
・講　師　川本信正氏（スポーツ評論家）
　　清川正二氏（ＩＯＣ委員）

**司会(高津)**：本日は「ＩＯＣ体制と現代スポーツ」というテーマで、本学ＯＢであられる川本信正先生、清川正二先生をお迎えして、シンポジウムを開催させていただきたいと思います。

わたくしども一橋大学の研究スタッフはそれぞれ分担して諸外国の国民スポーツ研究を共同して行なってきているわけですが、その中で昨年あたりから国際スポーツの全体像をどうとらえたら良いかという問題意識をいだくようになりました。

いうまでもなく国際スポーツの全体像を把握することは困難な作業であります。そこでわたくしどもは議論を重ねました結果、まず国際スポーツ組織に注目する、とりわけ現在の国際スポーツ組織の指導的立場にあるＩＯＣに注目して、現在のＩＯＣ体制を分析することを糸口として国際スポーツの全体像に迫っていこうと考えました。

そこで本日は、実際にオリンピック運動の担い手でもあり、オリンピック運動やＩＯＣ体制にわが国でも最も詳しいお二人の先生をお迎えして、オリンピックの理念・運動の今日的意義は何か、そして今日のようなスポーツの国際的展開の中でオリンピックとＩＯＣはどのような役割と課題をもっているのか、という点を中心にしてお話をお聞きして、わたくしどもの認識を深めたいと思っております。

では最初にお二人の先生にお話しいただいて、その後、質疑応答に入っていきたいと思います。

まず清川先生お願いします。

### 政治化とオープン化

**清川**：ＩＯＣの最近の課題という点についてお話ししようと思います。

ご承知のようにＩＯＣの活動はオリンピック大会を中心にしています。この大会をできるだけ大きな催物にしようというのが、百年前にＩＯＣを始める時からのＩＯＣの考え方でした。つまり、オリンピック大会という具体的にみんなが目で見ることのできる催物を、できるだけ大きな、地球的なものにすることによって、オリンピックの理念を地球のすみずみの人にまで普及していこうというねらいがあったのです。ですから創立以来ＩＯＣが精力を集中したのはオリンピック大会をできるだけ大きな催物にすることだったわけです。

そしてこの目的は最近のオリンピック大会をみればわかりますように――テレビの専門家の調査によれば地球の人口48億のうち半分以上の25億の人間がロスアンゼルス大会をテレビで観たそうですが――一応達成されたと、オリンピック大会は地球最大の催物になったとＩＯＣは考えています。

ところが非常に皮肉なことにものごとは大きくなってくると必ず弊害がでてまいります。これは歴史のしめすところでもあります。大きくなったオリンピック大会もその例外ではありえず、さまざまな弊害が生じてきています。それにはいろいろな問題がございますが、その中で大きなものが二つあります。

ひとつはオリンピック運動に対する政治の介入

の問題、政治がオリンピックを政治目的に利用しようとしている問題です。

その具体的な現われが過去3回の大会で起こった集団不参加運動——よく言われる「ボイコット」の問題です。このモントリオール、モスクワ、ロスアンゼルスと過去8年の間におこった問題は政治家によって指導されて起きた問題で、オリンピック大会の運営に大きな影響をなげかけました。また次のソウル・オリンピック大会でも政治問題が大きくからんで、その可能性があるということでＩＯＣとしても非常に頭を痛めている問題なのです。

それから2番目の問題はいわゆるオリンピック大会のオープン化の問題です。

ご承知のとおり、クーベルタンらＩＯＣは近代オリンピックを復活させる時、近代オリンピックの参加選手はアマチュアに限るという絶対の前提条件を決定いたしました。この方針にもとづいてＩＯＣは過去第1回大会からオリンピック大会を開催してまいりました。今日、これだけオリンピック大会が世界の人々の興味をひき、価値を認められているのもこのアマチュア原則があったがこそであるとわたしは思っています。もし初めからプロが参加していたら、これほどの興隆に至ることはなかったのではないかと思います。

その意味で、クーベルタンおよびＩＯＣは非常な先見の明があったといえますし、その後のＩＯＣもアマチュア原則を守り、正しい方向でオリンピック大会を発展させてきたといえると思います。

### ＩＯＣ内の二つの潮流

ところが今日、これだけオリンピック大会が大きくなってくると、ＩＯＣの中にもアマチュア原則とはちがった別の考え方が出てきました。

具体的にいえばそれは、オリンピック大会が地上最大の催物であればあるほど、そこで行われるスポーツ競技は地上最高の水準のものであるのがふさわしいという考えであって、これは今のサマランチＩＯＣ会長を中心とする理事会の大部分の考えです。

こうなると、先にオリンピック大会の参加選手はアマチュアに限るとしたアマチュア原則が邪魔になります。同じスポーツの中で、プロ・スポーツの競技者の水準が、アマチュア・スポーツの競技者のそれよりはるかに高い場合があるからです。

だからこの際アマチュア原則を放棄して、アマチュアであるか、プロであるかにこだわらず、最高の技術水準をもって選手を集めよう、そしてオリンピック大会で世界最高のレヴェルでのスポーツをやろう、それこそが将来のオリンピック大会を永続させる正しい方向である、という主張がなされることになります。この考えの人達を急進派とよびましょう。

このような急進派の人達に対してＩＯＣのもうひとつのグループは次のように考えます。

オリンピック大会というものは社会の変化に応じて変化しなければならないという考えは当然のことであり、ＩＯＣも古典的なアマチュアリズムにこだわりつづけることなく柔軟に対応してきたのであり、それに応じてさまざまなイヴォリューションを行ってきた。

しかしわれわれはイヴォリューションは必要とするけれども、レヴォリューションは必要としない。

急進的な変革を行うことは大きな混乱を招く。われわれは漸進的な考えで改善していいのであって、急進的変革によって、今までＩＯＣの先輩が残してくれた、何ものにも変えがたい遺産を捨てさってはならない。

その遺産とは、ブランデージ元ＩＯＣ会長が典型的に表わした表現をかりれば、オリンピック大会はピュアでオネストでクリーンでなければならないとする哲学である。この哲学があるからこそ、世界中の人々がオリンピックに対してさわやかなすがすがしいイメージをもってくれるのであり、大会を熱心に観てくれるのである。

だからわれわれは、ＩＯＣの先輩が残してくれたこの遺産をもっと生かして守っていくべきであって、これに反するオリンピック大会のオープン化

には反対せざるを得ない——と、こういう考えです。

わたし自身は後者の立場にあります。

このほかにも、ＩＯＣはいろいろな難題をかかえておるわけですが、主要なものといえば、以上の二つの問題ではないか、と思います。

**司会**：どうもありがとうございました。

続いて川本先生、お願いします。

## オリンピックの理念

**川本**：清川さんとはいろんな問題でほとんど意見が一致しますので、今日は清川さんを補充する発言をさせてもらおうと思っています。

わたしがオリンピックをフォローするようになったのは1931年からですが、その間にオリンピックは大きく変化しました。そしてそこでいろいろな問題も生じてきているわけですが、ただオリンピックの理念、すなわちオリンピズムというものは、これを正しく解釈する限りにおいて、これからの社会できわめて貴重な価値をもった考えではないかという感じを最近、深めています。

ではこのオリンピズムとはどういう理念なのか。

これはギリシャに本部のあるオリンピック・アカデミーが1975年のセッションで適切に定義しています。

それは「オリンピズムは人間の身体活動を手段として全体的に調和のとれた発達をはかろうとする思想であり、また身体活動、特にスポーツによってフェアプレーとスポーツマンシップを身につけ、平和という人類最高の価値を生みだすことをめざす思想である」というものです。

この定義はＩＯＣ憲章の基本原則、オリンピック運動の目的とされている原則と密接に関連しています。言うまでもなくご承知のことと思いますが、その原則の一つは、スポーツの基盤となる肉体的、道徳的資質の向上をはかること、二つは、深い相互理解と友情によって、スポーツを通じ青少年を教育し、より良い平和な世界の建設に寄与すること、三つは、世界中にオリンピック精神を広め、国際親善を深めること、四つは四年に一度オリンピック大会を開くということですね。それからこのほかに大事なことは、スポーツへの参加を政治・宗教・人種によって差別しないという無差別原則。

これらの原則・理念は、今のわれわれ人類の生活において、平和な世界を望む人類において基本的な理念だと思っています。このことは、オリンピックの歴史を通じて一貫して変ってないわけであります。

しかしこれはこれとして、いま現代スポーツで一般の人の関心をひいているのが、アマチュアリズムの問題と商業主義・コマーシャリズムの問題です。

この二つの問題を理解する前提として、1970年以後、世界のスポーツ構造に非常に大きな変化があったことを念頭におかねばならないと思うんです。

一つは、スポーツ・フォア・オールの運動です。これは文明が高度に進んだ先進国の人々が、自分の健康に危機感をもつようになってスポーツをやりはじめ、スポーツ人口が非常に増加してきたことを背景にしています。

もう一つはエリート・スポーツの高度化という問題です。

かつては一日に二時間も練習すれば、少し能力のある人だったらすぐ世界の水準に手がとどいた時代もあったのですが、今は全くそうではありません。特に70年以後、スポーツ科学が発展し、スポーツの技術も科学的に研究され、競技者の基礎体力も科学的に増強されるようになって、スポーツのレヴェルが非常に高度化するようになったのです。

こうなるとスポーツで高いレヴェル、世界的なレヴェルをめざそうとしたら、生活の余暇にレクリエーション活動としてスポーツをやっていたんではとてもかないません。それこそアマチュアであろうがプロであろうが、生活の全てを自分のめざすスポーツの技術的水準の向上のために捧げなければならない——マッキントッシュが60年代に

既に言っている言葉を借りれば――「フルタイマー」であらざるを得なくなってくるわけです。

しかし、フルタイマーである以上、どこかで自分の生活の保障がなければなりません。自分のポケット・マネーで世界的な水準をめざして生活の全て、フルタイムにスポーツに従事するということは、ふつうの人間にはとうていできることではありません。

ここでこのエリート・スポーツの高度化によって選手の生活保障という問題がでてきたのです。

そしてこれが、古くからのアマチュアリズムを揺がす原因になったわけです。

日本では今年あたりになってようやく日本体育協会がアマチュア規定を廃止して「スポーツ憲章」をつくりましたけども、アメリカではもう1970年にそういう動きが始まっていたんです。

1970年、ＡＡＵの全米体協の会長にジョン・ケリーという人物が就任した時――このジョン・ケリーのお父さんというのがアメリカで大きなレンガ会社を起こした人で1920年にオリンピック大会のシングル・スカルで優勝しているんです。ところが同じ年イギリスのヘンレイレガッタ（これはイギリスの貴族的なアマチュアリズムの起こりといわれているんですが）に行ったらレンガ積み職工の前歴があるという理由で、ヘンレイレガッタの規定に違反するとして出場を許されなかったというエピソードがあるんですが――アマチュア規定、アマチュアルールというものは偽善者をつくる以外何も効力がない、われわれはもうアマチュア規定というような偽善的なルールはやめて、現在のスポーツの情勢に適応した、新しいルールをつくるべきだ、と言っているんですね。そしてその場でＡＡＵの名称である、アマチュア・アスレティック・ユニオン・オブ・ユナイテッド・ステイツから「アマチュア」をけずって、アメリカン・アスレティック・ユニオンにしようと提起がなされているんです。それでＡＡＵの会長の就任披露というと、正装してタキシードなんか着た紳士淑女がでてくる会で、それまではアマチュアリズムというものがスポーツの基本的な価値だと思いこんでいる時だから、みんな仰天しちゃったんですね。

しかし、それからあちこちで情勢が変わってきて、74年にいたってＩＯＣのキラニン会長がＩＯＣ憲章からついにアマチュアという言葉を削ったということになるわけなんです。

## アマチュアリズムの問題

今でも日本はアマチュアリズムがスポーツの基本的な価値であるという考えが根強く残っています。世界の中でも日本ほどアマチュアという言葉に執念をもっている国はないと思います。

それで日本でもうひとつの大きな誤解は、アマチュアリズムはクーベルタンが言いだしたことで彼の終生変わらぬ主張であったということです。ところがこれは非常に大きな誤解なのです。

オリンピック大会の参加資格の問題は、クーベルタンがＩＯＣを作った1894年以来、第１回のアテネ大会を開くに当っていろいろ議論になりまして、とりあえず規定がないからということでイギリスのアマチュア規定を適応したわけなんですが、これに対してクーベルタンは最初から疑問をもっていたんです。

すでに1894年のＩＯＣのビュレッティンにイギリス流のアマチュアリズム――彼は常に必ずイギリスのアマチュアリズムというんですが――はスポーツを少数の富裕階級の独占物にする恐れがあるとはっきり書いています。

1910年のＩＯＣ総会でも、イギリス流のアマチュアリズムはプロレタリアートに対する挑戦である、つまり金のない者をオリンピックから追放してしまうものだというかなり過激なことを言っているんです。

クーベルタンという人はだいたい貴族主義者というふうにいわれておりますけれも、基本的には教育者でありまして、めぐまれない階級に教育と文化を浸透させようというのが彼の基本的な教育理念だったんです。1910年に先のような発言をした後で、各国にアンケートをまわして、体育の教

師はなぜアマチュアであってはならないか、一度プロになった者は終生アマチュアの資格を失わなければならないのか、競技をするものがそれに必要な経費を保障されてはならないのか、競技に出場する場合なぜ休業保障を受けていけないのかというようなことを問うているんですね。

そして彼が亡くなる前年（1936年）の9月にもフランスのロートという新聞に寄稿して、自分にとって最も不可解なのはイギリスのアマチュアリズムである、あれはひと握りの百万長者のみがスポーツを楽しもうという規則であって、一般の勤労者はスポーツから除外しなければならないようなルールである。こんな時代遅れのルールは全くの猿芝居にすぎないと書いているんです。

クーベルタンはオリンピックにおけるアマチュアリズムということに終生疑問を持ち続けていたわけです。彼がスポーツ理念としてもちつづけ、オリンピックに参加する人に求めたのは、フェアプレーと誠実さloyaltyだけであったのです。

ではなぜアマチュアリズムがオリンピックの不動の理念になったのか。

それは1952年から1972年まで20年にわたってＩＯＣを独裁的に支配したアヴェリー・ブランデージという百万長者に因るところが大きいと思います。この人が実に病的なピューリタニズムというか大変な理想主義者であって、もうアマチュアリズムこそスポーツの最高の理念だと、最高の倫理だとして、それこそクリーンだ、ピュアだ、オネストだと言いつづけたわけです。それでフランスのアルペンスキーの問題なんか起って一層彼の存在が鮮明になって「ミスター・アマチュアリズム」と称されることになるんです。

この20年間のブランデージの活動が日本なんかでは非常に信望されて、また日本の体協は明治の創立以来積極的にイギリスのアマチュアリズムを輸入してきたという背景もあって――大正9年の日本で最初のメーデーが行われて、労働運動が非常に広まっているその最中に当時の日本体育協会はマラソンで1着から5着になった人が人力車夫だったので除外してしまい、車夫組合と大紛争をおこすという騒ぎがあったんですが、このことからもわかるように――体協にはアマチュアリズムは尊い理念であるという考えがしみこんでいるわけです。

その中で日本ではスポーツの最高の価値、フェアプレーとヒューマニティという価値が見失われてきたのだと私は思います。スポーツの最高の価値はこのフェアプレーとヒューマニティにあり、そこにはアマチュアとかプロの区別はないと思っています。

### スポーツ構造の二元化と商業主義

もうひとつの商業主義・コマーシャリズムの問題に移りましょう。

先ほど少し言いましたように、今日の日本を含めた世界のスポーツ構造は、スポーツ・フォア・オールの市民スポーツと高度化をめざすエリート・スポーツとにはっきりと二元化されています。これは70年代以降のスポーツの新しい現象であり、この二元化の事実を認識しないで、二つがどこかでつながっているだろうとか思っていると、世界のスポーツ界のことは何もわからなくなります。スポーツ構造の二元化は、今日のスポーツ界を認識するための前提なのです。

商業主義・コマーシャリズムの問題は、企業がエリート・スポーツのショー的価値に目をつけていろいろ手を出してくることから生じてくる問題なのです。

現在、企業のスポンサーのおかげで日本の体協加盟の競技団体は財政的な心配がなくなっています。わたしが長く関係していた日本陸上競技連盟は、むしろ素寒貧であることが誇りであるような団体だったのですが、あのデサントが冠になって8カ国陸上をやってからにわかに大金持ちになって、今では3億か4億かの財産をもった財団法人になっています。今日では冠大会を行うことに各団体とも何の違和感も感じていないといっていいでしょう――冠がはやりだした頃、体協会長の河野謙三さんが「こんなことじゃまるで競技団体は

芸者の置屋みたいなもんじゃないか」と言って、こんな事考え直せと研究委員会をつくらせたんです。ところが、そこに電通の副社長を呼んでレクチャーさせたら、いっぺんで電通の論理に屈服しちゃって、冠大会は全く問題ないと、なかには、ライフル射撃のように、「俺の方にも冠つけてくれ」なんて言ったところもあるぐらいになったらしいですね——。

またオリンピックにも、ロスアンゼルス大会がユベロス商法で成功したことによって、商業主義がどんどんはいってくると思います。余暇開発センター——通産省の管轄なんですが——が出している『ロアジール』という雑誌の1986年12月号に、ロスアンゼルス大会での宣伝効果がいかに大きかったかに関する詳しいレポートがのっています。

社会主義国にも商業主義は浸透しつつあって、例えば北京マラソンはサントリーの宣伝の場になっていますし、モスクワの体育館で柔道の大会をやれば、日本の企業の広告がいっぱいでてくる状態なのです。

このように商業主義が繁栄してきており、これからもおそらくその度合は増すものと思われます。そして商業主義の繁栄によってたしかにスポーツ界はメリットをうけているのであり、商業主義がスポーツを支えることは、わたしは決して否定すべきことではないと思っています。

しかし、ここで警戒すべきことは商業主義によって、競技団体と選手個人の自主性が損なわれることです。商業主義によって選手個人が利用されたり、人間性が汚されたり、またスポンサーのいいなりになって競技団体がプログラムを組んだりすることは警戒しなければならない問題だと思います。

現にソウル・オリンピック大会では、アメリカのテレビの意向によって六種目の競技の決勝を午前中に行なうようになっています。こうなると、選手は朝の4時頃から起きて体調を整えなければならなくなり、また他の選手の迷惑になることも考えて選手村以外で宿泊しなければならなくなる可能性もでてきます。そういう問題が現実におこっているんです。

それにロスアンゼルス大会の開会式の選手宣誓の時に、ふつうは代表がでてきてその後に旗手がついてくるようになっているんですが、あの時なぜか旗手がトラックを一周したんです。その時は変わったことやるなあと思って観ていたんですが、後でわかったのは、実はこれテレビのコマーシャルタイムのための時間かせぎだったんですね。

むろん、テレビによって視聴者が増え、放映権料がはいることはいいことなんですが、プログラムの中味にまで口を出させてはいけません。

ＩＯＣや各競技団体は大いに警戒してもらわなければならないことだと思います。

**司会**：ありがとうございました。

それでは質疑応答にはいります。

## クーベルタンにおけるナショナリズムとインターナションリズム

**唐木**：清川先生におたずねします。先生は、ＩＯＣは当初からオリンピック大会の巨大化をめざして活動を行ない、巨大化に伴なって政治的に利用しようとする勢力が働きかけてきたとお話しになりましたが、クーベルタンは第一回ＩＯＣを設立する時、国際的なスポーツ大会のもつ政治的意味について何も考えていなかったのかどうか、お伺いしたいんです。

例えば彼は教育者として知られナショナリストとして知られているわけですが、オリンピック運動を行なう中で、フランスという民族をどのように位置づけていったのか、そしてそれに対してインターナショナルなものをどういうふうにからめあわせようとしたのか。彼は当時の政治情勢の中で一定の判断があったように思われるのですが、そういう点に関して何がご存じのことがあったら、教えていただきたいと思います。

**清川**：ご承知のとおりクーベルタンは根本的には教育学者であったわけですが、彼が物事を考えはじめた19世紀中頃のフランスは革命につぐ革命で、国民は疲労困憊しており、青少年なんかほっ

たらかしにされて生きていくのが精一杯という状況でありました。

この状況をみてクーベルタンは、このままでは祖国フランスは亡びると考え、祖国再建のために健全な肉体と精神をもった青少年を教育によってつくるべきだと考えて、教育制度の改革が必要だと考えます。

そして教育課程の中でとりわけ体育が重要だと考え――それまでフランスの教育課程には体育なんてものはほとんどなかったわけですから――当時、体育課程が一番進んでいるといわれていたイギリスに2回も3回も行って勉強してくるんです。

だからフランスの教育改革を行ない、その中で体育課程を新しいものにしようというのが、クーベルタンの最初の考えだったと思います。

そしてまた彼は熱烈な愛国者であったわけで、当初はフランスの青少年の改良を目的としていたんですが、それをやりはじめているうちに、次第に彼の考え方が世界的な視野に止揚されていき、スポーツを通じての国際交流・国際親善・世界平和への寄与という考え方に拡大されていったと思うんです。

だから最初はナショナリストとしてスタートしたけども、次第にそれをはなれて、インターナショナリストになっていったと思うんです。

**川本**：それでそれに関連しますけど、ノエル・ベーカーがクーベルタンがＩＯＣをやめた直後の1928年のアムステルダム大会について書いたものがあって、そこに「クーベルタンはショービズム――超愛国主義、超国家主義という意味でしょうか――と闘って傷つき倒れた」という記述があるんですね。これが具体的に何なのかわたしにはわからない。セントルイスがあったりしてストックホルムの前だから非常にうまくいっている時期だと思うんだけれども。

**唐木**：フランス国内で激烈な闘争があったということですか。

**川本**：わたしにもね、それがわからないんです。何を具体的にいうのか。キラニンが編集した『オリンピックゲーム』っていう本がありますね。あの中でノエル・ベーカーがアムステルダム大会の思い出を書いた部分にあるんだけども。

**唐木**：オリンピック、つまりスポーツを教育に結びつけていくという発想はイギリス的なものだと思うんですが、当時のフランスは体操が主流であって、これはプロイセンへの対抗上、兵士養成と体操を結びつける、そして命令と号令に押込んだ身体づくりをしていくというものだったわけです。

これに対してクーベルタンは批判して闘っていく、しかしフランス国内では彼の主張が十分受け入れられなかったということもあるようですね。

### オリンピックとスポーツ・フォア・オール

**早川**：ムスタール――彼はフランスの労働者スポーツ・体操連盟（ＦＳＧＴ）の会長ですが――の書いたものにも、そういう記述がでてきますね。

それから1928年頃というのは戦間期で、社会も激烈なブロック編成が行われている時ですね。労働運動も大きな試練の場を迎えており、労働者スポーツ運動も政治重視かスポーツ重視かということで揺れ動いている時期なんです。

そういう中でまた、労働者スポーツ運動も非常に大きくスポーツ界の中に登場してくる時期だと思うんです。

クーベルタンが1917、8年頃に労働者大学を構想しておりますし、やはり彼の視野の中に労働者スポーツ問題がはいってくる時期にあたるのではないでしょうか。当時の混沌とした政治や経済の流れの中で、彼自身、自分のことが整理できなくなっているんではないでしょうか。その意味では非常に興味深い時期だと思いますね。

**川本**：クーベルタンについてはまとまった伝記がないし、彼自身にもまとまった著作がないんですね。

**清川**：今度、クーベルタンの書いたものが三冊になって出るそうですね。クーベルタン研究委員会というのがあって、そこがフランス版で出すそうです。

**唐木**：私もそれを、ドイツの方の新聞で知ったんですけども、その中でおもしろいと思ったのは、クーベルタンは既に当時から、スポーツ・フォア・オールということを言っているんですね。

**清川**：スポーツ・フォア・オールは彼の言葉のようですね。

**川本**：しかも、クーベルタンが言ったのはオール・スポーツ・フォア・オールなんですね。全てのスポーツを万人のものに、という。ＩＯＣの本部がローザンヌに決まった時に書いたものらしいですがね。最近はＩＯＣにもスポーツ・フォア・オール委員会ができたでしょう。

**清川**：ええ、特別委員会としてつくりました。

**内海**：具体的にはどういう構想があるんですか。

**清川**：チェコのＮＯＣの会長（Mr.Himl）がサマランチＩＯＣ会長にはたらきかけて、ＩＯＣもエリート・スポーツだけでなく、スポーツ・フォア・オールの方向、スポーツの公共化・大衆化の方向へ進むべきだとしてつくられたんです。　わたし自身は、ＩＯＣがそこまで手がまわりきれるか、という多少の懸念はあるんですが、やらざるをえないことかもしれないと思っています。

## ＩＯＣとＩＦ

ただＩＯＣというのは精神運動をやっているムーブメントの推進者であって全世界のスポーツの統率者ではないんですね。だから事業としては、四年に一回のオリンピック大会を開催するだけなんです。当然、世界選手権を開いているＩＦ（国際競技連盟）に口を出していないし、厳しく一線を画しています。

オリンピック大会でもＩＯＣは、ルール・審判をＩＦから借り、選手をＮＯＣから送ってもらって開いているわけで、ＩＯＣというのは選手もなければルールもない。ただ大会の主催権をもっているだけなんです。

歴史的にいえば、ＩＯＣは各国のスポーツの権威者に頼んでＩＦやＮＯＣをつくってもらった経緯があり、当初はＩＯＣが主導権をもって、ＩＦやＮＯＣは遠慮をしていたという時期もあったわけです。しかし現在ではＩＦやＮＯＣも財源もあり、ルールもつくり、強力な基盤をつくりあげてきましたので、三者は並列の状態であると思っています。

だから今日のＩＯＣの仕事というのは全世界にオリンピック・ムーブメント、その内容は先ほど川本先生のおっしゃったフェア・プレーとかスポーツマンシップとかいう、いろいろなヒューマニズムを中心とした理念を推進させることです。

競技の実際面はＮＯＣとＩＦにまかせて、ＩＯＣは精神的に全世界のスポーツをリードしていく、オリンピック・ムーブメントを推進していく、そして四年に一回オリンピック大会を主催していくというのが現在の考えですね。

ですからジャーナリズムの一部の人からみれば、ＩＯＣは昔の権威を失ってＩＦとＮＯＣと同列に落ちてきたと、いずれＩＦとＮＯＣが力をつければＩＯＣは必要なくなるんじゃないか、世界選手権の方が権威があがり、オリンピック大会もなくなるんじゃないか、とみえるかもしれないのです。

ところが実際、現状をみればそうじゃないですね。この間もＩＯＣの総会で確かめたんですが、選手・役員の大部分が、世界選手権の優勝よりオリンピックの優勝を問題なく重視し、強く望んでいるんです。現場の感覚はそういうことだと思うんです。

ただ国際的なアドミニストレイターの立場でいくと、ＩＦやＮＯＣにしてみれば、ＩＯＣは何をやっておるかと、やるべきことはやってないじゃないかと、われわれがもっと出ていってやらなければこの問題は、オリンピック・ムーブメントという問題はうまくいかないという考えが、今あらゆる場合に出てきているわけです。だから今後、それをどう調和していくかというのは、もちろんＩＯＣがイニシアチブをとってやらなくてはならないわけですが、これは非常に難しい問題です。

## ソウル五輪開催問題

川口：現在問題となっているソウル・オリンピックの開催権の問題ですが、ＩＯＣは共同開催を提案しています。この問題を、ＩＯＣ憲章の関係ではどういうふうに理解していくべきなのか、それは憲章問題と関わりなく、国際的な政治問題として考えておられるのか、それについて解説していただきたいのですが。

清川：開催権について説明しますと、厳密にいえばソウル大会の主催者はＩＯＣであるわけです。ＩＯＣは選挙で多数を得た都市に大会の準備を委嘱するだけなんですね。したがって、憲章その他でもこの立場は厳重に守られており、あらゆる指令は細部にわたってＩＯＣからソウルの組織委員会に出されており、組織委員会はＩＯＣからの委嘱を忠実に実行し、毎年の理事会総会にあらゆる準備計画を報告して憲章や指令に対して違反がないか確かめられながら６年間仕事をしていくわけです。そういう意味で極端にいえば、組織委員会はほとんどイニシアティブはとれないんです。

それから最近では、組織委員会がいままで出していた大会への招請状を、不参加問題がおこりましたから、ＩＯＣが出すことになりました。

これもひとつの例でありまして、あらゆることをＩＯＣが全部指令を出している、それに基づいた範囲での運営を組織委員会がやる、というそういう仕組になっているのです。

話は関連しますけれど、ＩＯＣは一年前までに招請状を出しまして、６ケ月前までに返事を下さいといって、期日を切って出す――これをデッドラインと称しますが――わけです。これには参加するという返事を出すか、あるい参加できませんという、理由をつけるにしろつけないにしろ、返事を出すか、あるいはほっておくか、三つの返事のあり方があるわけです。だから何も返事を出す必要性はないわけです。道義的にはありますけどね。

だから、ソウルの場合も大会６ケ月前のデッドラインということが問題になっていて注目を集めているというわけです。

川口：北朝鮮側のオリンピック共同開催問題はどういう根拠にもとづくのか、よく理解できないでいるのですが。

清川：わたしは全然根拠はないと思いますね。

例は悪いけれども名古屋がソウルに半分やらせてくれと言うのと同じ立場だと思いますね。ただそこに政治の問題がからんでくるから、韓国もＩＯＣもにべもなくリフューズできずに悩んでいるわけです。憲章だけからいけば何らオブリゲーションもないですね。問題にならないですね。

川口：新聞報道によればＩＯＣはかなり誠実にそれに対応しようとしているように思えますが。

川本：四つの競技はよろしいと。これは韓国も同意したわけです。ところが未だに回答しない、逆に八競技ほしいと、人口比率にしろと、これは無理ですよ。

実際にそれをやったとしてもね、今度は各国の選手団が南北に分裂しなければならないでしょう。メチャクチャなオリンピックになると思いますね。

清川：仮に円満に話がついてもね、ジャーナリストはどうするんだ、観光客はどうするんだというような技術的に難しい問題がいっぱいあるようですね。だからまだまだ尾をひきますね。

### オリンピックの課題と スポーツの国際的組織・体制

関：現在の世界のスポーツ界は政治化と商業主義化がすすみ、先ほど川本先生がおっしゃったように競技団体や選手が主体性を喪失し、人間性が破壊されている状況にどんどん追いやられていると思うんですね。

その状況の中でオリンピック運動の理念であるフェア・プレーやヒューマニティ――これにわたしも大賛成で、スポーツの理念としていかなければならないと思います――を選手や競技団体が保持して、ますます発展させていかなきゃらないと思っているのですが、ではそういう理念を保持・発展させるにはどういうふうに体制なり、制度・組織なりを変えていったらいいのか、という点についてお考えをお聞かせ願いたいのですが。

**川本**：ＩＯＣとしては宣伝活動だと思いますね。今わずかに“Olympic Review”という機関誌を出しているだけですから、とても足りないですね。

もっとマスメディアを動員してオリンピックのイデーを浸透させていくことが必要ですね。

**関**：体制・組織の問題はどうですか。

**川本**：ＩＯＣの体制・組織の問題はだいぶん前から問題になっているんですが、今はＩＯＣは例えば清川さんなら清川さんをＩＯＣ委員として日本へ常駐させておく、つまり日本に駐留するオリンピック大使という形にしていますね。これに対しては、そういうのは非民主的だと、逆に各国から代表を出すべきだという意見もあって、それはそれでもっともな意見なんだけれど、しかし実際考えてみたら164の加盟国があるわけでこれは大変なことなんです。国連なんかが変に硬直して機能を失っていくのと同様にですね、これを収拾していくのはとても難しいことだと思うんです。だからやっぱりああいうニュートラルな組織にもひとつの味があると思うんです。

それからその他ＩＦだけの会議、ＮＯＣだけの会議とかありますね、そこにＩＯＣの理事が出ていったり、合同でやったりしていますが、あれをもっと活発にやっていけば意見も疎通してくると思いますけどね。

オリンピックの理想を実現していくためには技術的には宣伝活動だと思いますね。

**清川**：われわれもそう思うんです。現在の国際的な組織はだいたいＵＮ方式、加盟国から一人の利益代表という方式をとっていますね。これに比べるとＩＯＣというのはユニークなシステムで、今のところわれわれはこれがいいと思っているんです。

というのも、ＵＮ方式だと小さな国が膨大な発言をして、民主的にみえてかえって不公平な状況がかなりな場面ででてきます。だから今むろん完璧だとは誰も思ってないんですけれども、まだ現段階では発展途上にあるという立場からいけば、この体制がベターではないかという考えをもっています。

**川本**：具体的にわたしがＩＯＣに注文したいのは、先ずソリダリティー運動、連帯運動ですね。ＩＦと協力して発展途上国にスポーツ指導していくと同時にオリンピックの理念を普及していく運動。

もうひとつはオリンピックは何といっても平和運動ですからね、平和宣言くらいやってほしいということですね。

ヴェトナム戦争のとき、ノエル・ベーカーが平和のアピールを出さないかとブランデージに進言したんだそうです。そしたらブランデージは、そういう政治問題はわれわれは関与しないって言ったらしいですね。あの人にかかったら何でも政治問題なんですよ。

それからブランデージと新聞で対談した時、メキシコ大会の時で、黒人の南アフリカ反対運動が起こっていたのであれをどう思うか聞いたんです。そしたら「ダーティーだ」と言いましたね――彼には東京オリンピックの閉会式の時の光景もダーティーだったらしいですね。市川の映画にも不快そうな顔して映ってましたよ――。

今度オリンピックコングレス、東京でやるんですが、あれはほんと広島でやって核廃絶の平和宣言でもやったらいいんですがね。

**清川**：率直に言いますと、ＩＯＣはいま力たらずですね。今年なんかノーベル平和賞の候補の名前には載ったそうですけれどね、しかし、まだとても選にはのらない。

ＩＯＣは今まで３回のボイコットを経験しましたが、私が思うのは、やっぱりスーパーパワーが四つに組んだ問題となると、ＩＯＣ会長ははるかに実力がないという、一応の努力はしたけれども実際には何の効果ある処置はとれなかったということですね。それが偽らざるわたしの印象です。

だからまだＩＯＣ自体が、ノーベル賞に値する実績はないし、それをやる組織、人物がちょっといないのかもしれませんね。

**早川**：ちょっといいですか。今のボイコット問題ですが、「ボイコット」と「不参加」というのは同じ概念として考えてよろしいですか。

**清川**：ＩＯＣはオフィシャルには「ボイコット」という言葉はいっさい使っていません。「不参加」ノン・パティシペイションを使います。

ＩＯＣが使わないようにしている言葉が二つあって、一つは巨大主義、ジャイガンティズムという言葉で、これはＩＯＣ自らが巨大化したオリンピック大会というのはおかしいというので使っていません。もう一つがこの「ボイコット」です。

**早川**：今までの「ボイコット」という言葉のニュアンスで考えますと、不参加する側というのはＩＯＣやオリンピック運動に対する、かなりな挑戦なわけですね。それに対してどうしてＩＯＣが毅然とした態度をとらないのか、今まで不思議だったのですが。

**清川**：ＮＯＣは参加するオブリゲイションはないんです。ＩＯＣが公認しているＮＯＣではあるんですが、オリンピック大会にご招待しますが出ていただけますかというだけで、出て下さいとは言わない。だからＮＯＣにとっては何ら参加義務はないんです。

**早川**：現在オリンピックは何億もの見る人々に支えられているといってもいい状況だと思うんです。そこで見る側の力、スポーツを批評する力を育てていくことも重要な問題になるのではないでしょうか。

**清川**：実はたまたまわたしＩＯＣの委員会の中で広報をうけもつプレスコミッションの委員長をやっているんです。ＩＯＣとしても大衆の声を出させるために今スポーツジャーナリストの世界的な会議をずいぶん企画しているんです。

その典型的なのがシスモSISMOで、これは第１回を84年に開き、世界中のマス・メディアを集めてオリンピック・ムーブメントへの批評とか、将来の展望を専門的な立場で討議してもらいました。第２回目は88年に開きます。これが一番大きなものですね。それからオリンピック・コングレスこれが90年に東京であります。

それからカルガリの冬の大会の時に、ジャーナリストを中心に一般の人も含めて大きなシンポジウムを開きます。ＩＯＣも世界中の人の意見を自由に出させて参考にしようという考えをもっています。

**司会**：どうもありがとうございました。まだまだお聞きしたいことはいっぱいあったのですが、時間がまいりましたので、このへんで終りにしたいと思います。お二人の先生ごくろうさまでした。

（本シンポジウムは、科学研究費補助金を受けて行われている「国際スポーツ組織の歴史・社会学的研究」の一部である。見出しは研究部でつけた。）